PROJECT

重なりあう呪術と科学

文・写真
白川千尋

共同研究 ● 呪術的実践 = 知の現代的位相──他の諸実践 = 知との関係性に着目して（2014-2017 年度）

本共同研究では 2014 年 10 月のスタート以降、本稿を執筆している 2016 年 5 月までの約 1 年半の間に、計 5 回（2014 年度が 2 回、15 年度が 3 回）の研究会が開催された。このうち最初の 2 回で行われた研究発表については、本誌 149 号で共同研究代表者の川田牧人（成城大学）が概要を紹介している（川田 2015）。それを受けて本稿では、残りの 3 回の研究会での各発表とそれらをめぐって行われた議論などを引き続き概観することで、共同研究のこれまでの進捗状況などについて述べるべきなのかもしれない。しかし、各発表の内容や議論が多岐にわたることなどから、ここではそうしたことは行わない。各発表のタイトルや発表者名などは民博共同研究のホームページ（http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/iurp/14jr169）でご覧いただくこととして、本稿ではむしろ、一連の発表や議論から触発される形で浮かび上がった 2、3 の論点をめぐって省察を行うことで、共同研究の今後の展開を個人的に展望してみたい。

物質的因果関係と呪術のリアリティ

本共同研究の目的の 1 つは、呪術の個別性や一般性を明らかにするべく、呪術とそれ以外の知識や実践、たとえば科学、医療、宗教などとの相互関係を検討することである。これらの関係のうち呪術と科学の関係をめぐる既存の議論に関していうと、前者を後者の否定形、すなわち非科学的存在と位置づけ、両者を相反する関係にあるものと捉える見方を無視することができない。しかし、これまでに行われた研究会では、そうした見方の一面性がたびたび指摘されてきた。この点に関して、私の主たる研究対象地域であるヴァヌアツの人々の例に即して具体的にみてみたい。

ヴァヌアツの教師などの教育エリートや、セブンスデイ・アドヴェンティスト（SDA、安息日再臨派）をはじめとした一部のキリスト教派の信徒のなかには、科学的な見方や考え方を重視する人々がいる。これらの人々は、ヴァヌアツの伝統医療のなかで中心的な位置を占めてきた呪文や夢見などを、科学的根拠のないデタラメなものとみなし、実効性自体を否定することが多い。ところが、他者に意図的に危害を加えるために行使される超自然的技術としての邪術に関しても同様の評価を下しているかといえば、意外にもそうではない。ヴァヌアツのほかの多くの人々の場合と同じく、彼ら彼女らの間でも邪術の実効性や実在性、いい換えればリアリティが否定されることは稀である。

これらの人々が邪術のリアリティについて語る際、しばしばその根拠とするのが、邪術による病気の発生過程である。その典型的なものはおおむね次のようであるという。

邪術の標的となった者が、邪術師によって秘かに呪物を混入された食べ物や飲み物を口にすると、呪物は飲食物とともに腸のなかに入り込み、そこにとどまって周囲の血液を吸い集めながらかたまりと化す。かたまりは次第に大きくなってゆき、やがて腸を塞いだり、腸壁を破壊したりするようになる。その結果、腸の機能は低下し、最終的に標的となった者は死に至る。加えて、かたまりは腸から体の別の器官や部位に移動し、そこでもまた大きくなってゆくことがある。そうなると、移動先の器官や部位の機能も低下し、当事者はやはり死に至ることになる。

以上の簡単な描写からも明らかなように、邪術による病気の発生過程は、物質の作用の連鎖による因果関係（物質的因果関係）として理解されている。科学的な見方や考え方を重視する人々は、こうした物質的因果関係を科学的な視点の中心的な特徴の 1 つとみなす傾向が強い。この点からすると、上述の病気の発生過程は物質的因果関係として理解できるという点で、科学的視点からみても根拠があることになる。そして、そうであるがゆえに、これらの人々の間においてもまた邪術はリアリティのあるものとして捉えられていると考えられるのである。

ヴァヌアツ・トンゴア島の伝統医療の治療者（右）と患者（左）（1995 年 10 月）。

重なりあう呪術と科学

加えて、邪術のリアリティをめぐるこれらの人々の認識を考える際には、上述の邪術による病気の発生過程が、生物医学的な用語や概念によって把握される場合があるということも見落とせない。たとえば人々の間では、腸内に入り込んだ呪物から生じたかたまりは、生物医学的にはガンの腫瘍であると位置づけられることがある。また、ほかの器官や部位へのかたまりの移動は転移として捉えられることもある。このようにして、邪術によ

る病気の発生過程が生物医学的な観点から把握できることも、それらが科学的根拠の所在を示しているという点で、人々が邪術のリアリティを受け容れる際の重要なファクターになっていると考えられる。

さて、ここまでみてきたヴァヌアツの人々の例からは、邪術に関わるものごとが科学的な観点から説明されたり、根拠づけられたりしていることがわかる。そこでは、呪術（邪術）と科学は必ずしも相反する関係にあるものと位置づけられてはいない。むしろ重なりあう部分をもつものとして捉えられているとみることができる。もちろん呪術と科学のある種の類似性をめぐっては、よく知られたフレイザーの議論などがある（フレイザー 1951:126-147）。しかし、そこではもっぱら両者の客観的な類似性に焦点が当てられている反面、それらに直接関わる当事者の人々によって呪術が科学的に根拠づけられたり、両者が重ねあわされたりするといったありよう（両者の交錯とでも呼べるような関係のありよう）については、議論の射程に入っていない。

ヴァヌアツの首都ポートヴィラの SDA 教会（1995 年 5 月）。

一方、呪術と科学のそうした関係についてさらに理解を深めてゆくうえでは、当事者の人々にとって科学がどのようなものとして認識されたり、立ち現れたりしているのかという点に関して検討を行うことも不可欠である。科学的な見方や考え方を重視するヴァヌアツの人々についていえば、彼ら彼女らにとっての科学的な視点とは少なくとも次の 2 つに関わるものといえる。1 つは、すでに触れたように、ものごとを物質的因果関係として説明しようとする見方であり、もう 1 つは、近代医療の従事者や科学者といった科学の専門家とみなされる人々から御墨付きを与えられた見方である。こうした見方が科学的なものとみなされる傾向にある。ちなみに、ヴァヌアツの在来語では科学に相当する語として英語由来のサイエンスが使われている。

以上のようなヴァヌアツの人々の科学的な視点に関する認識は、科学の専門家である科学者などの科学認識とは異なるところが大きいかもしれない。場合によっては科学者の側から誤解、あるいは疑似科学と断じられてしまうような要素も多分に含まれているかもしれない。しかし、そのような科学者の科学に関する認識と人々のそれとの差異からみてとれる科学の多様なありよう（「科学の複数性」とでも呼べるようなありよう）こそ、呪術と科学の関係に関する理解を深めてゆくうえで十分留意しなければならないことであろう。この点はまた、先述した本共同研究の目的にアプローチするうえでも重要なことであると思われる。

感覚的経験とマテリアリティ

邪術による病気の発生過程に関するヴァヌアツの人々の説明に戻ると、そこで言及されている物質はいずれもみたり、感知したりすることができるものとされている。たとえば呪物には植物や動物を燃やした灰、動物の骨片などが使われるとされるが、それらはいずれも実際にみることができる。また、腸内に入り込んだ呪物から生じるかたまりも手術をすれば取り出してみることができるし、かたまりの大きさやそれができている部位によっては触って感じることもできるとされる。これもやはりこれまでに行われた研究会のなかでたびたび指摘されてきたことだが、こうした物質（先述の物質的因果関係を構成する一連の物質も含む）のもつマテリアリティと、それを基盤とした感覚的経験もまた、呪術が人々の間でリアリティのあるものとして受容される際にきわめて重要な役割を果たしているといえる。

ただし、感覚的経験のなかには、誰もが簡単に経験できるものばかりではなく、一定のプロセスを経ないと感得できないというものもある。つまり、顕微鏡を使って血液中のマラリア原虫をみることが、その手法に習熟していない者にとっては容易ではないように、適切な見方や感じ方をすでに感得している者から教わるなどして習得していないと、あるものをそれとしてみたり、感知したりすることができないようなものもある。

感覚的経験はともすると個人的なものとして検討の俎上（そじょう）に載せられがちだが、それを適切に理解するためには、感覚的経験のこうした社会的とでもいえるような側面にも注意を払う必要がある。本共同研究では、呪術とそれ以外の知識や実践との関係の検討と並んで、感覚や行為の側面から呪術的知識や実践の特性を明らかにすることも目的の 1 つとなっている。この点からすると、ここで触れた感覚的経験の社会的側面が呪術の個別性や普遍性とどのように関連しているかをみきわめることも、共同研究における今後の興味深い課題の 1 つとなってこよう。

【参考文献】

川田牧人 2015「現代の実践＝知環境における呪術」『民博通信』149:16-17。
フレイザー，J.G. 1951『金枝篇（1）』永橋卓介訳、岩波書店。

しらかわ ちひろ

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は文化人類学。著書に『南太平洋の伝統医療とむきあう――マラリア対策の現場から』（臨川書店 2015 年）、『テレビが映した「異文化」――メラネシアの人々の取り上げられ方』（風響社 2014 年）など。